



Title	A O入試における調査書の扱いについて
Author(s)	大作, 勝; 南部, 広孝
Citation	大学入試研究ジャーナル. 2006, 16, p.65-70
Issue Date	2006-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/16300">http://hdl.handle.net/10069/16300</a>
Right	

This document is downloaded at: 2018-12-19T14:21:34Z

# A O入試における調査書の扱いについて<sup>1)</sup>

大作 勝，南部広孝（長崎大学）

わが国の多くの大学では，A O入試に際し出願書類の1つとして調査書の提出を求めている。しかしこれが選抜過程でどのように使われているかについては必ずしも明確でない。そこで調査書はどのような場合に使い，どのように使えばよいかの具体的利用に関する知見を得るために，長崎大学の平成 17 年度A O入試データを解析した。ここでは 学習成績概評と合否，国語の評定平均値と自己推薦書の得点，主要5教科の評定平均値と自己推薦書の得点，全体の評定平均値と自己推薦書の得点との関係について調べた。

## 1. はじめに

平成 16 年4月の法人化をはじめとして，わが国の国立大学は現在大きく変わりつつある。大学の組織や大学が行う活動も多方面からの見直しが進められているが，効果的な大学教育の実施や卒業生の質の保証が求められる状況のなかで，それらの前提となる入学者選抜方法のあり方も改革の重要な課題の一つとなっている。すでに各大学から公表されている中期目標・中期計画において，多くの大学がアドミッションポリシーの明確化や多様な選抜方法の導入，大学入学後の成績等に関する追跡調査の実施などを謳っている。これらのうち，多様な選抜方法の導入については，周知のように，すでにさまざまな取り組みがなされてきている。例えば推薦入学制度は 1990 年代初めからかなりの大学で導入されており，A O入試も平成 12 年度に3大学で導入されたことを契機として徐々にその採用が広まっている。このような動きは，単に大学のおかれた状況だけではなく，中等教育の多様化とも密接に関係しているものと思われる。中等教育に関しては，高等学校での総合学科の導入や英語科など職業科としてひと括りにできないような専門学科の新設や実業高校の整理と改編に加えて，6年一貫制中等教育学校の設定等の動きがある。

このように多様化する選抜方法のうち近年導入する大学が増加しているA O入試では一般

に，推薦入学制度と同様，受験に際し複数書類の提出を課している。各大学ではそれらの書類をそれぞれの基準で扱っているが，その扱いが妥当であるかどうかについての検討は必ずしも行われていない。そこで本研究では，ほとんどの大学がA O入試出願の際に提出を求めている調査書に焦点をあて，調査書はA O入試の判定材料として使えるか，使えたとすればどのような条件の時か，どのように使えばよいか，などについて検討することを目的とする。解析対象は長崎大学の平成 17 年度A O入試第1次選考データである。

調査書に関する先行研究について整理しておく。富永はわが国の入学者選抜に際し高校から提出される調査書利用に関する実態について調査している（富永 2005）。利用した項目は評定平均値，学習成績概評，出欠，特別活動の記録であり，<sup>1)</sup> に関し国立大学のA O入試では，特定教科を利用した場合，重みをかけた点数化しての利用が多い，<sup>2)</sup> に関しては，一般選抜，推薦入試，A O入試ともに国立での利用率が高く，推薦入試とA O入試の利用比率はほぼ同じである，<sup>3)</sup> について利用率は高いが，利用方法については回答できない，<sup>4)</sup> に関し，A O入試では国立私立ともに利用率が高いと結論づけている。また，調査書を入試の判定資料として用いる研究ではないが，入学者の高校時代の成績と大学での成績ないしは医師国家試験の

合格率との関係を明らかにする目的で、調査書を解析データの1つとして使った研究が特に医科系単科大学で多くなされているし(平野・渋谷 1996; 平野・浅香・北原 1998; 竹生 2001), 選抜方法別に調査書の評定平均値と入試成績及び入学後の履修成績との関係を検討した研究もある(南・野尻・越田 2000)。しかし、こうした出願書類の入試における具体的利用に関する研究はなお十分とは言えない。

## 2. A O入試と調査書

解析を行う前に、A O入試における調査書の位置づけについて整理しておく。平成 17 年度入試で A O 選抜を実施した 25 国立大学のうち学生募集要項を確認できる大学について調べたところ、名古屋工業大学工学部第二部(夜間学部)や広島大学フェニックス入学制度など一部の募集単位で調査書の提出が求められていないものの、基本的には調査書が提出書類の一つとしてあげられている。それとともに、自己推薦書や諸活動の記録といった書類の提出を求められることが多い。ここで特に指摘しておきたいのは、調査書は高校が作成するのに対して、自己推薦書や諸活動の記録は志願者自らが作成するという違いがあるという点である。

A O 入試の実施方法は大学によってかなり異なるため、全体的な傾向をまとめることは難し

いが、一般的には、提出された書類と課題論文や面接その他さまざまな選抜方法の結果を総合的に評価することになっており、調査書を含めて「提出書類」とのみ記載している大学と評価項目の一つとして具体的に調査書をあげている大学とがある。いずれにしてもこれは、調査書が A O 入試の選抜過程で評価材料の1つとして利用されていることを示している。

## 3. 使用データ及び解析方法

長崎大学の A O 入試は平成 14 年度に教育学部、歯学部、水産学部の 3 学部で始められ、平成 15 年度からは全 8 学部で実施されている。ここではこれらのうち平成 17 年度 A O 入試における 6 学部のデータについて解析する。なお長崎大学の 17 年度 A O 入試では、第 1 次選考は調査書、自己推薦書などにもとづいた書類選考であり<sup>2)</sup>、第 2 次選考では課題論文、面接ほかが課せられ、また 2 学部(医学部、薬学部)が大学入試センター試験を課している(表 1)。本研究では、A O 入試に際し提出される出願書類中に記述されている指標と合否及びこれらと第 1 次選考で得られる得点間の相関をみることにした。具体的には以下のものである。

・学習成績概評と合否(志願者、第 1 次選考合格者、第 2 次選考合格者)の関係

表 1 平成 17 年度長崎大学 A O 入試の実施状況

学 部	募集人数	志願者数	倍率	第 1 次選考合格者数	第 2 次選考合格者数
教育学部	16(240)	102(879)	6.4	33	14
経済学部	5(415)	33(1,184)	6.6	11	5
医学部	10(201)	148(1,033)	14.8	51	10
歯学部	5(50)	34(329)	6.8	16	5
薬学部	10(80)	27(372)	2.7	22	4
工学部	29(400)	65(1,084)	2.2	52	37
環境科学部	4(140)	28(464)	7.0	14	5
水産学部	5(110)	28(567)	5.6	17	5
計	84(1,636)	465(5,912)	5.5	216	85

かっこ内の数値は(各学部又は全学の)全体の募集人数又は志願者数を示している。  
倍率 = (志願者数 / 募集人数)

- ・国語の評定平均値と自己推薦書の得点との関係
- ・主要5教科の評定平均値<sup>3)</sup>と自己推薦書の得点との関係
- ・全体の評定平均値と自己推薦書の得点との関係

本来であれば第1次選考と第2次選考で得られるすべての指標を対象にすべきであるが、第2次選考の成績との関係を見るにあたっては手続きの妥当性等を慎重に考える必要があり、本稿では第1次選考で得られる自己推薦書の成績のみを扱うことにした。

#### 4. 結果と考察

解析結果とそれらについて考察する。

##### 学習成績概評と合否の関係

まず志願者における学習成績概評の分布をみ

る(図1)。概評がA判定なのは、P, Q, R, S, T, U学部の志願者のそれぞれ47%, 53%, 64%, 36%, 32%, 47%である。また概評がB判定なのは、P, Q, R, S, T, U学部でそれぞれ37%, 41%, 30%, 36%, 50%, 42%である。さらにP, Q, R, S, T, U学部における志願者のそれぞれ16%, 6%, 6%, 29%, 18%, 11%がC判定である。したがって、仮に学習成績概評を志願者の基礎学力の高さを示す指標の一つと考えることができるとすると、かなり広い範囲の基礎学力分布からなる志願者群が長崎大学のAO入試を受験していると言える。またここで解析した6学部の全志願者中に、成績概評D及びEのものはいなかった。さらに志願者についていえば、学習成績概評A, B, Cの分布のしかたはこれら6学部で概ね同じであることもわかる。ついで合格者についてみる(図

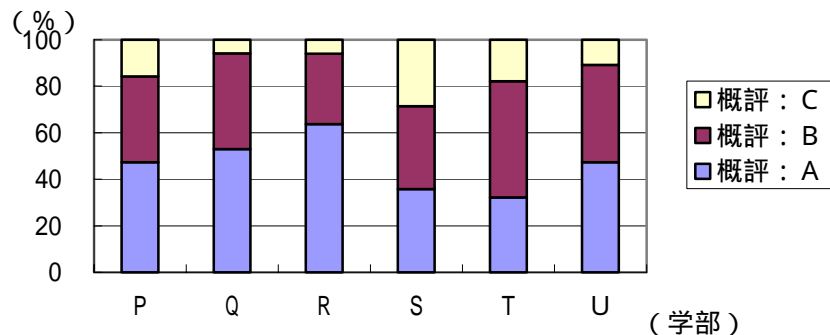


図1 6学部における調査書概評の分布(志願者)

2, 図3)。第1次選考合格者をみると、P, Q, R, Uの4学部ではそれぞれ96%, 94%, 100%, 90%がA判定であり、S及びT学部ではそれぞれ47%, 57%がA判定である。つまりP, Q, R, Uの4学部では第1次選考合格者の大部分はA判定であるが、S及びT学部ではかなりの割合でB判定者が残っている。さらにS, T及びU学部ではわずかの比率であるが、C判定者がいる。また第2次選考合格者では、P, Q, R, S, T, Uの6学部でそれぞれ100%, 80%, 100%, 20%, 60%, 100%がA判定となってい

る。残りは全てB判定であり、全6学部にわたって第2次選考合格者中にC判定のものは残っていない。第2次選考合格者の%付き数値は第1次選考合格者のそれらから多少変動するが、扱っている値そのものが極めて小さな値であることを考慮すると<sup>4)</sup>、S学部を除いて、各学部の全合格者に対するA判定の比率は、第1次選考合格者と第2次選考合格者間でそれほど大きくは変化しないといえる。これらのことから第1次選考では、ある学校単位又はクラス単位のなかで、基礎学力が相対的にある水準以上でな

いと合格しないことがわかる。すなわち換言すれば、前述したとおり、第1次選考では調査書と自己推薦書などの提出書類が判定資料として用いられており、この選考過程では、調査書に

関するデータが全判断量のどの程度を占めているかの多寡を問わないにしても、結果として、それらが何らかの寄与をしていることを示している。

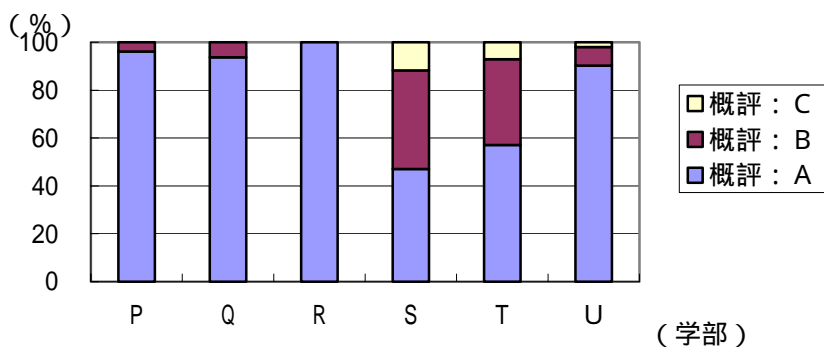


図2 6学部における調査書概評の分布（第1次選考合格者）

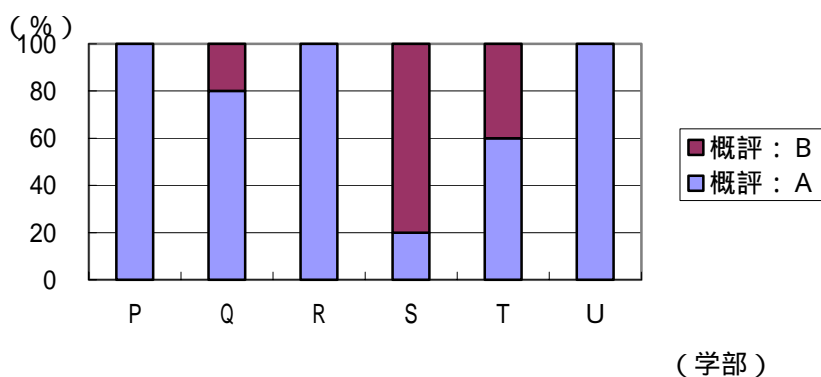


図3 6学部における調査書概評の分布（第2次選考合格者）

国語の評定平均値と自己推薦書の得点との関係

P, Q, R, S, T, Uの6学部すべてで正の相関があった（相関係数はそれぞれ 0.48, 0.35, 0.60, 0.24, 0.34, 0.35）。自己推薦書が日本語で書かれていることから、これが国語の評定平均値とかなりの程度関係していることは十分理解できる。またここで得られた数値における6学部間の差異が主として何に由来するかは、今のところ明確でない。これの解明のためには、更なる詳細な解析と考察が必要である。

主要5教科の評定平均値と自己推薦書の得

点との関係

P, Q, R, S, T, Uの6学部すべてで正の相関があった（相関係数はそれぞれ 0.50, 0.42, 0.68, 0.50, 0.36, 0.36）。これらの数値はどの学部でも国語の評定平均値との場合よりもわずかに大きい。

全体の評定平均値と自己推薦書の得点との関係

P, Q, R, S, T, Uの6学部すべてで正の相関があった（相関係数はそれぞれ 0.56, 0.47, 0.67, 0.52, 0.36, 0.34）。これらの値は、U学部を除いて、主要5教科の場合と同じよう

にいずれも国語の評定平均値との相関係数より大きい。これらの結果から、自己推薦書には志願者の国語力のみならず、総合的な力（能力）が表現されていると考えることができる。すなわち自己推薦書からは単に志願者の国語表現力だけでなく、着想、発想、考え方他が読みとれるからであろう。主要5教科の評定平均値と自己推薦書の得点との数値と比較すると、P、Q、Sの3学部ではわずかに増加するが、R、T、Uの3学部ではむしろやや減少するか変わらない。つまり大きくは変化しないことがわかる。

評価過程における調査書の利用のしかたにはさまざまな選択肢があり得るが、その一つは評定平均値を評価成績の一部に用いるやり方である。この場合もその採用方法はいくつか考えられるが、仮に主要5教科の評定平均値と全体の評定平均値のみに注目すれば、主要5教科の評定平均値を用いる、全体の評定平均値を用いる、そのいずれでもよいと思われる。

## 5. おわりに

本研究の結果をまとめると以下ようになる。すなわちAO入試に際し高校から出される調査書は、第1次選考で提出を求めている自己推薦書の得点と正の相関があり、また相関の程度も比較的高いという結果であった。

これらの結果を解釈し判断するためには、調査書や自己推薦書といった書類で何をみようとする（している）のかという点を明らかにする必要がある。例えば、調査書と自己推薦書で異なること（能力）をみようとしているとすれば、本研究の結果は意図とは異なる状況になっていることを示しているし、そうではなく調査書と自己推薦書で同じ能力をみようとしているとすれば、本稿で得た結果はその意図に近いものであると判断される（同じことは第2次選考で課される課題論文や個人面接についても言えると予想される<sup>5)</sup>）。ただしここで調査書と自己推薦書は出願時に提出されるものであり、自己推薦書には時として志願者以外に第3者の手が入

っていることも考慮すべきであろう。

本研究の知見としてわが国の大学のAO入試に際し、調査書は使えるか、使えんとすればどのような条件の時に、どのように使うか、について述べる。まず使えるかに関し、調査書はある程度使えたと結論できる。長崎大学のAO入試に限っても、調査書の使い方・扱いは各学部でそれぞれ異なっている。AO入試において志願者に調査書の提出を求めている理由として、大学側が彼ら／彼女らの基礎学力を判断するためと考えられる。もっとも基礎学力の判断としてより客観的と思われるセンター試験を採用する場合もある。しかしながら調査書で志願者の基礎学力のどの程度を担保できるかを即決するには疑問が残る。調査書に記載されている成績は現役受験者であれば概ね2年間と1学期程度の平均値であり、既卒者では3年間（全日制の場合）の平均値である。一方、センター試験は概ね1月時点での得点（学力）と見なされる。ただしこの場合もセンター試験の点数のみで基礎学力の高低を確実に判断できるわけではない。いくつかの研究によれば、高校時の調査書の成績と大学での成績との間には正の相関があるという（平野・渋谷 1996；平野・浅香・北原 1998；竹生 2001）。このことは、AO入試においても学力の担保としてセンター試験を採用するより、調査書を採用したほうがよいとの根拠を与えるものの1つとなるのかも知れない。つぎにどのような条件下で使えるかである。それは高校側から出される評定、評定平均値ないしは学習概評が「絶対的なものさし」ではないことを理解すればという条件であろう。さらに今ひとつ、どのように使うかである。調査書に書かれている記号、数値そのものをそのまま使う。又は記号と数値以外のものに重点を置いて使う方法があろう。つまり前述したがAO入試において、調査書は単に、各教科の評定平均値及び全体の評定平均値ないしは学習成績概評だけが参考にされているわけではない（富永 2005）。これから読みとれるものはなお多い。

AO入試ではないが高志願者倍率を伴う推薦入試に際し、第1段階選抜の重要な判断資料の1つとして調査書を利用している例もある(相馬・澤田・佐藤 2005)。この報告はまた、調査書の点数と大学入学後の成績は高い相関を示しており、推薦の方法が選抜の手段として理にかなっている、とも結論している。

調査書をめぐっては、こうした評価資料としての妥当性や意味だけでなく、次のような課題が存在するか今後課題となることが予想される。

現在調査書の保管期間は5年と定められているため、出願の条件を緩和した場合、調査書が提出されない受験生が出る可能性がある、いくつかの高校で2学期制をとるところが出てきており、この場合比較的早い時期に実施されるAO入試に際し、高校2年生相当までの成績しか提出されない可能性があるが、これをどのように扱うか、高等学校卒業程度認定試験(又は大学入学資格検定)合格者の調査書の扱い、例えばいくつかの科目でスコアのない場合があるが、これにどう対応するか、また外国留学をしたため、スコアがない又はわが国の高校の教科と対応するものがない場合の扱い、などである。今後もAO入試に調査書が使われる限り、これらの事柄についてあらかじめその答えを用意しておかなければならない。つまり調査書が使えない(使わない)場合、それでみようとしている能力を何で判断するかである。

最後に、いわゆる学校間格差をどう扱うかも避けて通れない問題であろう。しかしながらこれについては今のところ解決の名案はない。

## 注

- 1) 本研究の一部は、国立大学入学選抜研究連絡協議会第26回大会(東京)にて発表した(大作ら 2005)。
- 2) AO入試を実施している長崎大学8学部のうち1学部は課題論文を第1次選考に課している。
- 3) 地理歴史と公民の評定の平均値(どちらかの

値しかない場合は当該教科の評定)を社会の評定とし、これと国語、数学、理科、外国語の各評定との平均をとったもの。

- 4) 一般に国立大学が行っているAO入試は各募集単位あたりの人員が少なく、扱う数値も小さい。このためごくわずかの数値の変化で割合は大きく変わることがある。
- 5) もちろんもう一つの重要な点は「どの程度」意図に近いのか、あるいは異なるのかという点であり、それは相関の度合いが検討の対象となるだろう。

## 文献

- 大作勝・南部広孝, 2005, 「AO入試における調査書の扱いをどうするか」『国立大学入学選抜研究連絡協議会 第26回大会研究発表予稿集』: 71-76.
- 相馬仁・澤田幸展・佐藤昇志, 2005, 「推薦入学の現状と今後の取り組みについて」『国立大学入学選抜研究連絡協議会 第26回大会研究発表予稿集』: 103-108.
- 竹生政資, 2001, 「高等学校成績および入学試験成績の大学成績との関連について」『大学入試研究ジャーナル』11: 79-86.
- 富永倫彦, 2005, 「入学選抜における調査書利用の実態調査」『大学入試研究ジャーナル』15: 85-91.
- 南一郎・野尻洋一・越田豊, 2000, 「学内成績と入試成績および高校調査書」『大学入試研究ジャーナル』10: 41-48.
- 平野光昭・渋谷昌三, 1996, 「高校調査書に記載された成績及び諸活動と医師国家試験の可否の関係」『大学入試研究ジャーナル』6: 76-83.
- 平野光明・浅香昭雄・北原哲夫, 1998, 「面接の評価及び高校調査書は入学後の成績をどこまで予測するか」『大学入試研究ジャーナル』8: 67-75.